お気楽悪魔

Skywave

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お気楽悪魔

【Ｎコード】
Ｎ３３８６Ｓ

【作者名】
Ｓｋｙｗａｖｅ

【あらすじ】
ありきたりでなにが悪い！
いいじゃないかありきたりで、書いてみたいし王道ファンタジー。
でもパクリはなしで
を合い言葉に、過ちを犯すなら若い内だと思って始めました。

これは魔王の息子でありながら、金髪美少女な神様の加護を受けた
圧倒的最強チート主人公の物語。

始まり（前書き）

前作では、個人的な理由で勝手に完結扱いにして申し訳ありませんでした。

立ち直るきっかけのようなものもあって良い方向に傾いてきましたので、頃合いを見て前作の方もちゃんと完結させたいと思います。

でも先がさっぱり思い付かないので今はこちらで。

始まり

夜、街から少し離れた人通りの少ない道に夥しい量の鮮血が舞う。

「お前ら、ほんとしつこいな」

今も血を零して倒れていくその集団はどこかおかしい。背中には翼、頭には黒い角を生やしていて、その姿はさながら悪魔のようだった。

集団の真ん中ではその中でなら一番普通とも言える黒髪黒目の青年が、圧倒的な強さで惨劇を起こしている。

その青年がうんざりした口調で呟くと、手に持った長い刀を振るった。

ただそれだけで、青年の前に居た連中が絶叫と共に断ち切られていく。

「悪いけど、面倒だから焼くね？」

青年は、一度の斬撃で背後に残った集団に零すと手を向けた。

「ッギャァァァァ！！」

直後に爆発が起こった。

かと思えば、生き残りに向かって凄まじい速度で刀を振るう。

たった五秒、それだけの時間で惨劇は幕を閉じた。

「あ、ぁ……」

最後にその場に残った、理解できずに怯える女の子が一人、長い

刀を持ち、返り血を浴びる青年が一人と、一つ残らず真っ二つに裂けた異形のもの。

「……大丈夫？」

ふと、青年が声を掛けた。
陵辱を受けようとしていた少女を心配して。

「ひぃ……ッ！？」

しかし、少女は普段なら可愛らしいだろう顔を恐怖に歪めて、物凄い勢いで走り去っていった。

「あー……、ま、この姿ならビビって当然か」

淡い光を放って、青年の刀が短い鉄の棒に変わる。
それを青年は当たり前のように無造作にポケットに突っ込んだ。

「もう諦めなよ？」

そう言って青年に声を掛けたのはさっきまでその場に居なかった筈の少女。
背中には小さな羽を生やし、ふわふわと空を漂うところを見ると上から見ていたのだろうか。

「やだ。せっかくこっち来たのに」

その異常とも言える光景に、青年は声の方を向くことすらしない。
そんなことでは驚きもしなかった。そもそも2人は人間ではないのだ。

「わざわざ探さなくても、あんたに相応しい相手は意外と近くに居るかもよ？」

「俺はその人を探してるんだよ」

青年の言葉に、少女は深く深く溜め息を吐いた。

「……人間に興味がある悪魔なんて、学者かあんたら親子ぐらいよ」

少女の言うように、この青年と少女は悪魔なのだ。

その証拠に青年は二本の角、少女には黒い尻尾が生えている。

「いいだろ別に。俺は誰にも迷惑掛けてない筈だっ、多分っ」

「それよ。その考え方も変わってるわ」

少女は両手をひらひらと揺らした。

「そのくせ神の加護を受けてるんだっけ？　ほんと解らないことだらけ」

「他のやつに言うなよ？　ただでさえ親父が有名なんだから苦労してんだし」

「解ってる。で、次はどーすんの？」

「襲われてる人捜し」

「はぁ……？」

「なんか困ってるとこを助けると、見る目が変わるんだと」
「へぇ……、また懲りずに逃げられる訳だ？」
少女の嫌みに青年は少しだけムッとする。
「解ってないなぁ……。こういうのは難しいからいいんだよ」
「はいはい。じゃあ着いてくから早く行こ」
「こなくていいって」
少女は驚いた顔を青年に向けた。
「こっ、こんな、初めて来た世界でわたしを一人にするのっ！？」
「えー……？　お前も悪魔だろーが」
「そ、そうだけど放置はやめてよ。邪魔しないから」
「……まぁ邪魔しないならいいか」
――こうして、気楽な青年の物語が始まった。

始まり（後書き）

前回を超えるもの、より良いものをモットーに。

1話：邪魔（前書き）

よし、書こうと思ったはいいけど、また見切り発車。

先は考えてるようで全然思いつかない（汗

1話：邪魔

俺達は今、人間達の住む世界。人間界に来ています。
やっと来たぜ。さぁ観光でもしようか。

……と言うのに、

「死ねクソ野郎が！！」

何度やっても懲りずに俺を殺そうと向かってくる悪魔共。

……思わず溜め息が出る。

「……またか」

なんで向かってくるのか。
理由は単純、俺が賞金首だからだ。

なんでっ？
望んでないよ？

とまぁ冗談はさておき、望んでないのは本当で、ちゃんと理由がある。

俺には人間の母がいた。
だから名前も黒鵺衣　蒼空【くろぬい　ソラ】と凡そ悪魔に似つかわしくない感じだけど、それは別の話か。
――５０年前、俺は子供の頃、目の前でその母を殺された。
魔王の相手が人間だってのが気にいらなかったらしい。その時は

当然、ブチ切れたよ。
で、俺は魔王の息子だからってその頃から既に強かった為に僅か二秒で復讐を果たした。
不憫に思った神様が、悪魔の俺に加護を与えたのがその時だ。「そのままでは可哀想だからな」だそうで。俺はガキだったから普通にありがとう！って返してたけど……本当なら殺されてるんだろうな。
イメージと違って金髪美少女な神様にビックリしたのを覚えてる。
その力も使って、俺は気が済むまで暴れた。
……まぁ、大陸の形がちょっと変わってしまうぐらいには。　それがきっかけで、親父と敵対してた他国の魔王が怒ったらしくて……、晴れて賞金首に！
やったねっ！　……はぁ。

ちなみに額は知らない。
一度見たけど0が多くて覚えてないから。聞いた話だと、悪魔の永い一生を遊んで暮らせるほどだそうな……。
それに輪を掛けて、一人で行こうと思ってた人間界に何故か着いてきた桃色の髪をした女の子がいる。
その子、【ルナ・ティターニア】がまさかの売れっ子（古いか）アイドルだったりしたのだ。
これで、前からうざかった追っかけが更にしつこくなった。
それを俺が殺して、額が上がって、追っかけが増えて……、最近は悪循環に頭を抱える日々だよ。
と、考えてる間にその追っかけが俺に襲いかかってきた。

「お前を殺せばッ！！」

「お前らなんかに殺られるかよ」

……やれやれ。
ここは神の加護の一つ、錬金術でも使おう。

通常、錬金術は代価を必要とする。

さすがに無から作り出すのは俺の力じゃ無理だけど、たまたま拾った鉄の棒さえあれば、後は足りない代価を膨大な魔力で補える。
前に見た人間界の刀を頭に浮かべると、鉄の棒が俺の脳内イメージを精巧に模したものに変わっていく。

「消えろ」

刃には風の魔力を込めて、俺はそれを無造作に振った。

「ゲァ……ッ！！」

一切の無駄がない、刃の面積分の斬撃が飛ぶ。
それが通り過ぎれば大体のカタがついている。
悪魔共が恐怖におののいたのが見えた。
後は残ったやつを狩れば終わるか……。

「……ふッ！！」

踏み出した足に力を込め、前に跳躍する。
ベコッ。
と、踏み込んだ地面が少しめり込んだ。
その勢いをのせて、刃はなんの抵抗もなしに対象を切り裂く。
それを三度も繰り返すと、襲ってきた奴らは全員倒れていた。

「終わったかな……全く、何時もナンパの邪魔される身にもなれよ」

特に意味もなく刀を揺らし、辺りを見回してみる。

「ん……？」

と、見回す俺の足元から影が伸びた。　振り向けば、視界が一瞬にして真っ赤に染まった。

「……生き残りがいたのか」

恐らくは、敵の炎系統の魔法だろうと推測する。
視界を埋める程の火力を見れば弱くはないようだが……、

「ま、無駄だな」

神の加護、第二弾発動。

俺の体を中心に半径ニメートル、害となる一切の魔力を遮断する不可視の膜が拡がる。

喰らったことはないが、これをぶち破れるような力と言えば、親父の業火か龍の息吹きぐらいのものだ。
この程度の魔法なら避ける必要すらない。
それを証明するかのように、膜に触れた炎の塊がいとも簡単に四散した。

「なっ、一体なにが……？」

炎を放った悪魔の一人が言葉にならない表情をする。

「言ったろ。お前らじゃ無理だ」

ザンッ、と一瞬だけ小気味良い音が響く。
もう一度辺りを見て終わりを確認すると刀を元に戻した。
（錬金は、一回やってしまえばそれ以上の消費がない分やっぱ省エネだな）

「ルナ？　終わった」

「ほんとに？」

「あぁ、大丈夫」

安堵を浮かべて隠れていたルナが出てきた。
強力な神の加護、万能に見える力だが思い付くだけで欠点が２つある。

一つは、加護の字にあるように、攻撃に向かない。
まぁ、これは魔王級の魔力があれば充分だが。

もう一つは、ルナを隠れるように言った理由。
他人に分けられない、または与えられない。
自分にしか作用しないのだ。

よって、誰かを護ろうとすれば直接原因を駆除するしかない。
それも今のところは特に困っていないから、特に欠点とは言えないかも。
生まれつき頂点に君臨する種族である上に、神の力という相反する両者の中でも最上級の力を振るえる為、相手がいないからだ。

俺には良識もないけど際立った悪意もないから、その時の気分だけどルナは一応庇うようにしてる。

「それにしても、勇気あるよな。コイツら」

「まぁ、無理矢理ぶち破って出て来れるのってあんたくらいだしね」

人間界と魔界には二つを隔てる空間の壁みたいのがある。
多分、二つとも同じ世界にあるんだと思うんだけど、どういう仕組みかはわからない。
普通は稀に生まれる能力者でしか開けられない筈だが、今は世界の変動とかなんとかであちこちに穴が開いているらしい。それでも場所はランダム、開く時間もまばらで運が悪いと元の世界に帰れなくなる。
だから思った。

「だろ？　自分で出て来れないってことは二度と帰れないかも知れないのにな」

「ま、わたしの魅力に惹かれたんじゃない？」

ルナが笑顔でこっちを見る。
あからさまになんか言えって雰囲気をだして……。
んん、確かに可愛い顔はしてると思うけど……、

「へぇー……」

やっぱ俺には悪魔の好みはわからない。

「なっ、なんか突っ込みなさいよ！」

「えー……？　じゃあ、ポーズが古いわっ」

「元気ないし、ポーズなんてとってない！　ただの笑顔！　それに、じゃあってなによ！」

「あー、わかったわかった。あんまりギャーギャー言うと置いてくぞ？」

「そっ、それは困るのっ！」

「……全く」

俺は人間の彼女が欲しかっただけなのに……、これじゃ魔界とおんなじだ。

まぁルナはいいとして、追っかけ共が邪魔ばっかするし。

……なんで俺なんかに着いてくるんだか。

1話：邪魔（後書き）

なんか早くも王道から外れてる気が……。

まぁ作者自身なんかずれてるんでご容赦のほどを。

今のところ、ほのぼの惨劇ファンタジーですかね。

主人公に良識ないんで、はい。

2話：遊び

太陽が青空を楽しんでいる頃、俺達は人通りの多い街に来ている。
ていうか最初、太陽ってなんだと思ったよ。魔界じゃ月が延々と回ってるだけだから、目を閉じても見える白い斑点が鬱陶しい。
一度、人間界変装ツアーとかなんとかで親父に連れられて来たことはあるんだけど、その時はガキだったから記憶が曖昧で……、生活には困ってないけど慣れない感じ。
まぁ、服装は真似しないと騒がれるって解ったから行った意味はあったかな。
だから今は、なるべく流行から外れてなさそうな人の恰好を真似てるつもりだ。

「……ね、ねぇ」

と、ルナが不安げな声を出す。

「なに？」

「羽と尻尾、隠さなくて大丈夫かな？」

ルナの尻尾がふるふると左右に揺れる。
……はっ、目で追ってしまった。

「それぐらい普通だろ。みんな生えてるって」

髪がピンクって言うのはちょっと目立つかと思ったけど、ファッションって言っとけばいいだろ。小さい箱の中で絵が動くやつで見

たし。

「そ、そう……？」

「なにをそんな心配してんだか。じゃあ、いざって時は庇ってやるよ」

あれ？　前に助けた娘は生えてなかったっけ？

……まぁいいか。

「あ、ありがと。うん、それなら大丈夫っ」

納得してくれたみたい。

それにしても、人が多いと話し声が絶えないな。

こうしてる今も、「あっ、あの人かっこよくない！？」だの「あの角はオシャレなのかな？　なんか……ちょっと可愛いし」とか、誰だよモテてるやつ。

連れ出して殺してやろうか……って、俺かっ！？

声の方を見れば、なんとこっちに歩いて来るではないか。

「あ、あの……あたしらと遊びません？」

話し掛けたのは可愛らしい三人娘。

おぉぉぉっ！！

俺にも春キター！

うん、やっぱ人間って可愛いね。

今の俺には、チャラい男に絡まれているルナの話が右から左状態だった。

「キミめちゃくちゃ可愛いね？　なんか人間じゃないくらい」
「え……ちょっと、誰よ？」
「まぁま、ってその尻尾なに？　あぁ、新しいファッションか。似合ってるよ？」
「ま、待ってよ。ねぇ、ソラ？」
「お前が待て。今取り込み中だ。え、今から遊びに？　うん、行く」
「ホント？　話し掛けて良かった～」
「ね、ねぇ！　ソラっ！　聞いてるの？　ねぇってば！」
耳を通る声が曖昧で、俺は嬉しさのあまりに話し掛けてきた女の子達に着いていった。
歩いて15分。俺達4人は、絵がせわしなく動く小さな箱が並んでいる建物に入っていく。
そこで、女の子の一人から返答に困る質問が。
「どこに住んでるの？」
「……あー」
――困ったな。
え？　魔界。なんて言えないしな。
仕方ない。

「今は家出中だから最近はホテルかなー」

勿論、嘘だ。親父ありがとう。一度来たときに泊まったの覚えてて良かったよ。

「えぇっ？　若いのに一人で暮らしてるの？」

「あぁ、最初は苦労したけど慣れれば意外と普通だよ」

わかったような口調で、実は知ってる知識を総動員。
脳内はフル回転してたりする。

「じゃあ、その角は？」

「えっ？　……あぁ、オシャレだろ？　地元では流行(はや)ってるんだ」

「「へぇぇー」」

すっかり信じ込む女の子達。やば、出来過ぎてる自分が怖いよ。

「じゃあさ、その地元ってどこなの？」

「……あ」

くそぉぉぉ！！
自分で墓穴掘ったぁぁぁ！！
あ、ルナ置いて来ちゃったよ。

――俺がせっせと墓穴を掘ってる頃、ルナ――

「それって悪魔ファッションだよね？」
「えっと……、う、うん。そうなの」
「やっぱり？　だと思った。最近流行ってるからなー。まぁキミぐらい似合ってる子はなかなかいないけどね？　凄い可愛いし」
「へ、へぇー……そ、そう、かなっ？」
「正直、抱きつくの我慢してるぐらいだよ」
「あははっ」
——意外と巧くやってたりする——
「……ま、まぁそんなことはいいんじゃないか？」
「そう？　それなら、プリクラ撮ろうよ！」
「いいね♪　こんなイケメンと遊んだって言えるしっ！」
「プリクラ……？」
なんだそれ。
「まさか、知らないの？」
「え？　いや……」
「ふふっ、そんな訳ないでしょ？　からかっちゃ駄目だよー」

勝手に進む話は俺だけを放って行く。
こ、これはっ！　知らないとは言えない！
「あぁ、プリクラね！　おっけ、撮ろう撮ろう」
「「やったー♪」」
両手を叩き合う女の子達。
なにしてるか解らんし思わず適当に言っちゃったけど……、喜んでくれてるみたいだからいいか。
と言うわけで、見たこともない箱の中へ。
「ほらほら、早くっ」
「え、え？　なにがっ？」
「「ピースっ」」
よくわからない合い言葉の後に、箱の中の箱から俺達の絵が吐き出される。
……なんだコレ？
未知との遭遇に頭を抱える俺とは逆に、写真を覗き込んでなにやら言い合ってる女の子達。
「「はぁぁぁ、やっぱりかっこいい～！！」」
「ってか角、似合い過ぎでしょ。まるで元からあったみたいに」
街で話し合ってた時と同じ子が言う。

「はは、まっさかー」

額に嫌な汗を掻いたのは内緒だ。

それよりも、人間ってこんなだったのか？　もっと、おしとやかじゃないの？　悪魔にだけはモテたけど、全員がこんな感じだったら人間なんてっ。

母が人間だからって、自分でも人の愛情に飢えてたのは認めるけど、理想が高すぎたのかな。

そう考えると、なんだか脱力感を拭いきれない。

「……でも、もうお別れだね」

「うん、ソラ様ともっと遊んでたいけど……」

あ？　今、ソラって……？

「仕方ないよ。お金は欲しいし」

「「だねっ」」

一度も名乗った覚えはないぞ……？

情報を整理して、現状の把握。俺は答えにたどり着く。

あぁ、そう言うことかよ。

「騙したな？　……お前ら、タダで済むと思うなよ……！！」

今までにも騙されたことはある。しかし、悪魔の匂いがしなかったのは今回が初めてだ。仕方がないとは思うけど、同時に見抜けな

かったことが不甲斐ない。

「ふふっ、もう遅いですよっ♪」

角が可愛いと言ってた子から、牙が生えていく。それ自体が小さく、体格に見合った牙が。

悪魔にも色んな種族がいる。吸血種はその一種で、その多様さから俺が知らないやつも当然のようにいる。

しかし、所詮は雑魚だ。

俺の人を愛する気持ちを弄びやがって……。

「吸血種か……。にしては、人間の匂いがしたのはおかしいな？」

「最近は容易に手に入るんですよ？　人間の皮って」

「そ、だから簡単に後ろを取られちゃうっ」

「は？」

声が後ろから聞こえる。くそ、目の前の雑魚に気を取られたか。

急いで振り向いた時には鋭い爪が迫っていた。

「許さん。ちょっと可愛いとか思っただろ！　……馬鹿にしやがって」

――神の加護、第三弾発動――

俺の体から光が放たれる。

その光が三人を包み込んで、表情を驚愕に統一する。

「これは通常、高位の天使が悪魔を更正させる為の部屋なんだけど……、それだけに邪魔は入らないからな？」

自分の世界。
それが神の加護第三弾。
普通は白い世界らしいけど、行使したのが俺のため見渡す限り真っ黒。
人間界、悪魔界の２つ以外に自分の世界を作り出し、更に全てが俺の思い通りにできるというぶっ飛んだ力だ。さすが神。
まぁ弱い悪魔にしか使えないけど。
その理由は後に語るということで、今はとにかくお仕置きの時間だ。

「出してもらえると思うなよ。この世界は俺の意志でしか開かないからな。せいぜい怯えろ」

「「ひぐ……っ！？」」

全員の表情が、未知の恐怖で埋め尽くされる。
俺は一人、どう矯正してやろうかと不純な想いを馳せていた――。

――数時間後――

「あぁん、もっとぉ！」

「ず、ずるい！　あたしもっ！」

「イイのっ！　一生あなたのものでいいのぉっ！」

「あぁ、俺、悪魔に興味ないから」

なにをしたのかは秘密。ただ、こいつらは俺なしじゃ生きてけなくしてやっただけ。
それでもいいだろ。譫言のように繰り返す言葉。聞いてみれば、気まぐれで参加した社交界で初めて見た時から、ずっと俺のファンだったみたいだし。お互い楽しんだわけだから。
なんか良いことをした気持ちで、俺はこの世界に三人を放置した。

「……今日はなんか萎えたし、そろそろ切り上げるか」

今日は諦めて宿を探すことに。とは言え、人間とは違って体力は無駄に多い悪魔。疲労はあまりないため、寝るかどうかは魔力を著しく欠如した状態か気分だ。まだ明るいけどそれは関係ない。
疲れたしなー。うん、寝よう。と言うことで、行ってみたかったホテルへ。
え？　金？　そんなんあるわけない。
タダですよ、勿論。どうやってかは言わないけど。真似するから。
今は案内人まで付けて部屋の前。そこで俺はあることに気付いた。
あの世界では時間は止まったまま、それでも一時間は放置してる悪魔が一人。

「……やっちまったよ」

ソラぁ、放置は止めてって言ったのにぃ……なんて、聞こえた気がする。
まぁそれはあながち間違いでもなかったけど。
慌てて駆け付けて見れば、見渡す限りの人間。野次馬に集まった人々は一つの塊と化していた。
なにを売ってるのかわからない店にあった動く箱に目をやると、

動く絵の右上の方に桃色美少女悪魔っ子なんて書いてある。
真ん中には明らかに見知った悪魔が空を漂い、キョロキョロと辺りを見渡していて、
「……面倒くせっ」
俺は知らない内に愚痴を零していた。
「――あっ！」
そして気付かれる。そりゃ解るよ、目が合ったもん。
「騒ぐなよ……？」
それこそ一番面倒だ。緊急手段、俺は近くにあった店の屋上（一応、人間の女の子がいたら危ないから気を遣って）を、少量の魔力で爆破した。
ざわつく人々。確実に周囲は意識をそちらに向けている。
俺は魔王種である膨大な魔力を肉体強化にまわし、風景が霞む速さで注目の的になっていたルナを攫った。
「ったく、迷惑掛けんな。飛んだりしたら注目されるって解るだろ？」
「……だって、不安だったもん。頼れるのソラだけだし、こんな世界に来たのも護ってくれるって言うから……」
腕の中で丸まって拗ねるルナ。ふと、俺が見ると恥ずかしげに目を逸らされる。

と、目の前に地面が迫る。言っておくとルナは強くない。悪魔の中では無力なぐらいに。だから気を遣ってわざわざ優しく着地した。

「……全く。そんなこと言ったっけ？」

ブツブツと愚痴を零す俺に、目を逸らした為横顔に見えるルナは少しだけ悲しそうな顔になる。

「ちゃんと覚えてなさいよぉ……。これじゃ、あんたの言うことといちいち覚えてるわたしが馬鹿みたいじゃない……」

「……仕方ないだろ？　俺、悪魔に興味ないし」

それだけ言うと、俺は腕に抱えてるルナを下ろそうとする。しかし、袖を引く弱々しい力を感じて止めた。今度は恥じらう様子もなく、俺の黒い目がルナの目に映っていて、

「……わたし、人間に生まれてくればよかったかな……」

呟いた。

俺には微かにしか聞こえなくて、直ぐさま安易に聞き返してしまう。

「え？　なんて言った？」

「……なにも言ってないから。気にしないで」

「お、おぅ」

なにが不味かったか、それは俺には解らない。俺はただ、悪魔だ

ってのに少しの罪悪感を感じていて、ルナは何も言わなかった。

2話：遊び（後書き）

基本的に苦情でも構いませんが指摘などは遠慮なく。

3話：仄

来てしまった人間界。せっかくだし、綺麗な景色が見てみたいと言うルナの言葉が今回の始まり。

俺達は遠くに見えていた意外と近くの山に向かっている。

「……なぁ、これって歩かなきゃ駄目なのか？」

決して高くはない。でも面倒だ。俺は言い出したルナに問い掛ける。

「たまにはいいじゃない？　無理やり付き合わせたのは悪かったけどさ……」

「やだ。こんなの走ったら直ぐだし」

「仕方ないでしょ。あんたに追い付けないんだから」

まぁ、確かに……。

「あ、じゃあおぶってやるよ」

「えっ？　だ、ダメっ！　待って！」

このまま歩いてれば日が暮れるかもしれない。今は昼みたいだから大袈裟だけど、そろそろ我慢の限界。俺はルナを担いだ。

「ダメだって言ったのにぃ……」

「なにが？　そんな、おぶるぐらいで嫌がらんでも」
「ち、違うのっ。やじゃないけど……」
「けど、なに？」
「も、もういいよ。早く連れてって」
「歩いてる方がいいとか早く行けとか、変なやつだな……」
「放っといて！」
「いっつも放置すんなって言うのはお前だろ？」
「違うっ！　それぐらい解りなさいよ、馬鹿っ！」
「えー……？」
言いがかりだー。そう思いはしたけど叱咤されて走り出す。
「ちょっ……、は、早過ぎっ！！」
「お前が早く行けって言ったんだ。それ以上文句言ったら降ろすからな？」
「そ、そんな……じゃあせめて、速度緩めようよ？」
「無理♪もう限界っ」

加速するにつれ、ルナの声にどんどん余裕が無くなって行く。自分でも自覚があるぐらい、Sな俺にはちょっと楽しい。
これはもっといぢめなければ。

「あ、滑った」

「え、――……ッッ！？」

ジャンプした時、ふざけてルナを落としてみる。驚いてるのか声が出ないようで、目を何時もより見開いていた。そのまま、限界越えるまで放置。

「わ、わかったぁ！　わたしが悪かったから、もう助けてっ！」

「仕方ないな……」

突然過ぎて羽を広げることすら忘れたのか。縮まって小さくなってた。
って、俺は謝らすつもりじゃなかったんだけど。ま、いいや。とりあえず地面すれすれでキャッチ。

「も、もう止めてね？　これ以上されたらホントに死んじゃう……」

普段は気が強いルナ。しかし天性のビビりで、こうなるとめちゃくちゃ弱い。
潤んだ目を向けられて、ちょっと笑ってしまった。
俺がこれぐらいで止めると思ったのか？　甘い甘い。

「次はどうされたい？」

「このまま、なにもしなくていい……」

あれ、キャッチした腕の中でうずくまってしまった。

「答えないんなら仕方ない。俺が勝手に決めるか」

「ま、まって！　答えるから――」

なにか反応あるかな？　って思ってたら必死に抱きついてきた。普段なら有り得ない行動にちょっと顔がニヤける。この時だけは可愛いのになぁ……。

と思いつつも結局、飽きるまでいじめ抜くと気付けばルナは安らかに気を失っていた。頂上に着いたのも丁度、同じ頃。

さて、起こそう。

「おーい。着いたぞ？」

パチパチと頬を叩いてみる。

「うぅ……ん」

起きない。

面白がって悪ノリして胸を撫でてみる。俺は悪魔に興味ないから、決して欲情したわけではなく。

「……あっ、はぅ……んん……あ」

「起きろ～」

「ん……えっ？　なななな、なにやってんのよ！？」

ルナは起きた途端、物凄い勢いで胸を押さえて後退った。なんか言われるのは予想してたけど、にしても気持ちいいくらいの拒絶反応だ。まさかこんなに嫌われてたとは。
心なしか凹む。

「あ、やっと起きた」

「やっと起きたじゃない！！　あんたはなにがしたいの！？　悪魔に興味ない筈でしょ？」

「確かに俺が悪いけど、そんな怒らんでも……」

「誰だってキレるに決まってるでしょ！！　って……えっと、もしかして……わたしに興味あーー」

「いや、それはない」

うるさかったので即答する。やっぱそこは押さえとかないとな。

「……やっぱそうよね」

あら、元気がなくなった。

「どした？　何時も言い返すのに」

「うるさい！！」

「……なんだよ。俺がお前に興味がなくても、そんなこと関係ないだろ？」

「それはそうだけど……べっ、別にいいじゃない！　って、怒ってんのはあんたが、その……失礼なことしたからでしょぉが！」

「うん、それは俺が悪かった」

半笑いになってしまって、誤魔化そうと下を向く。

「ま、まぁ、謝るんだったら許してあげる。……そ、それに、そんなにイヤでもなかったし……」

意外と誤魔化せたみたいだ。というよりそれどころじゃなさそうで、俺が顔を上げるとルナは横向いて顔を真っ赤にしてた。

って、見てて聞いてなかったよ！　今、なんていった？

「は……？」

「なっ、なんでもないっ！」

ま、いいか。

そんなことより気になっていたことが一つ。ついでに聞いてみるか。

「それより、なんでこっちにまで着いてきたんだ？」

「い、いいでしょ……それぐらい」

「よくない。何時も適当に済ますけどそろそろ追っかけが鬱陶しい」

「ぅ……か、軽くあしらえるからいいじゃない」

「って言うか、何時も庇ってんだからそれぐらい言えよ」
「……っ、うるさい！　うるさいっ！　と、とにかく、わたしはあんたに着いてくけど理由は言えないのっ！」
「だから、それじゃ納得できなーー」
食い下がる俺の言葉をルナが遮った。
「な、なによっ。……そんなにイヤだったの？」
んむ……、そう言われるとそこまで嫌なわけでもない。
「いや、それほどではないけど……」
「そう、ならいいでしょ？」
「んー……ま、いっか」
あれ、なんか言いくるめられてる？
と、俺が腑に落ちず頭を傾けている時、ルナの視線は固定されていて、ただ一点を茫然と見渡していた。
「どうした？」
「綺麗……」
なにが？

「……？」

「だから、景色よ。景色っ！　今日はこれ見に来たんでしょ？」

あぁ、そうだっけ？

完全に忘れてた。と、気を取り直してルナと並ぶ。

右から吹く風が頬を撫でる。夕方に差し掛かった日差しは適度な温度に保たれていて、体の中からじんわりと温めていくような……、とは言っても悪魔は恒温なため関係はないけど、とにかく不満を纏めて投げ捨てたように気持ちがいい。

目の前を桜の花びらが舞い、眼下一面をピンク一色に染めていた。魔界にはない、人間界独特の四季というもの。どうやら今は春のようだ。初めて知ったよ。

……とまぁ色々と言葉を並べてみたけれど。

「……これのどこが綺麗なんだ？」

俺の一言にルナが息を吐く。

「あんたはそう言うと思ったけど、風情ぶち壊しよ……」

「風情て。人間じゃあるまいし」

俺が何気なく呟くと、ルナは少しだけ黙って。

「いいじゃない。憧れるぐらい」

「え？」

……って、マジでイメージしちゃったよ。

「いや、まぁいいんじゃないか？」
「じゃあもし、わたしが人間だったら……、あんたはどう思うの？」
「……ん～～」
そうだな。もしそうだったら俺は……、
「――あー、そりゃヤバいかも。でも、それがどうかしたのか？」
「……ううん、なんでもない」
ルナは、そう言うと視線を戻す。
意味が解らない。と、俺は呆然として見る。吹いた風に髪がサラサラと靡いてて、だらだらと過ごしたせいか日が傾き、オレンジがかった光が照らしていたルナの横顔。　悲しげに微笑むような姿に、俺は少しの間魅入っていた。
「……それにしてもお前って、意外とあったんだな」
なにか、とは言わない。ただ視線を落とした先にある、両手に残ってた柔らかい感触と心地よい暖かさ、ふと思い出して考えるより先に呟く。
「……？　――なっ！！」
「いいと思うよ？　少なくとも、俺はそういうギャップに惹かれる」
ルナがふるふると小刻みに震える。

これは流石に逆鱗に触れたみたいだ。

「……む、無理なのはわかってるけどっ、殺してやるっ！！」

それから顔を真っ赤に染めて殴りかかってくる。しかし俺には当たらない。だって遅いし。

「はっは、無理だって」

「うぅぅ！　もういいっ！　着いてこないでっ！」

虚しく空を切る拳に業を煮やして、どこかへ歩き出した。

「どこ行くんだ？」

「知らないっ！　あ、後で探して！」

……意味わかんねー。

4話：誘拐（前書き）

今回、ルナ視点です。

4話：誘拐

彼は、いや、あいつはわたしを探しには来ない。やるせなさと気恥ずかしさが入り混じって、溜め息ばかりが口から零れる。なんだか一気に老けたような気分で、道のりも曖昧にしながらわたしはあいつと行った街へと向かっていた。

「なんであいつはいっつもそうなのよっ！！」

胸に渦巻くもどかしさ。それがなんなのか、今のわたしにはまだわからないみたい。ただ、このモヤモヤをぶちまけたらあいつとは今のままじゃ居られないと思う。そんなわたしの気持ちとは反比例に、底抜けに明るい光が纏わりついて気分をより一層落ち込ませる。

「あれ、キミって昨日の悪魔っ子？」

俯いて歩くわたしに、人間の男が声を掛けた。一瞬、見ても誰だかわからなくてキョトンとする。

「ほら、昨日ちょっと喋ったじゃん」

あぁ、昨日の。思い出したと同時に、わたしに一つの想いが芽生えた。もしかすると、他のやつと遊んだらこの気持ちが紛れるんじゃないか、と。

「うん、覚えてるよ。……それより、今日は暇なの。遊ぼっ？」

「え？　マジで？」

男の顔に喜びの色。好意を利用してちょっと罪悪感、それもすぐに消えて、ごめんね。ちょっと利用させてもらうから。心の中で呟いた。

まずは何処行こっか？　男が問う。

わたしはそれにどこでも、と答えた。

それからはあんまり覚えてない。彼が今年で１８になること。チャラく見られるのがコンプレックスであること。それくらい。

気付けば日は暮れて、建物の真ん中を通り抜ける風は冷たく、もどかしさに悶えるわたしの頭を冷やした。

「今日は楽しかったよ。キミ、家はどこなの？　送ってくよ」

「いいの。自分で帰れるから」

よく気遣ってくれる人。それが男への唯一の印象。

男の気遣いは断ったけど、それでも食い下がってくるので顔を背ける。

一緒に思考も此処から離れて。わたしには男の声がぼやけて聴こえてた。

そのまま、暫く遠くを見ていたわたし。それは思わぬ形で終わった。彼の声が聴こえなくなったから。

「……なっ、なんでここに？」

気になって向けた視線の先に、男の姿はない。

変わりに、この世で一番見たくなかった顔。大きな翼と牙を見せて笑うその姿に、わたしは驚きのあまり心臓が止まるかと思った。

「知り合いの能力者に開けてもらったんだ。さぁ、帰るぞ」

目の前に居たのは言うことすら嫌悪する、認めてなくても立場は変わらないわたしの父親だった。

「なに言ってんの？　わたしはあなたの世話になった覚えもない。今更、保護者面して指図しないで！」

そう、幼いわたしを育てたのはこの男ではない。
面倒を見てくれたのはソラと、そのお父さん。
この悪魔はわたしを捨てたのだ。抱えるだけの価値を見出さずに。

「まぁそう言うな。漸く養えるようになったんだ」

「……どういうことよ？」

「私をそれなりの地位に置いてくれるそうだ。お前を魔王様に差し出すことでな」

急になにを言うかと思えば、そういうことね。
どうやら、ちょっとは売れ出したわたしを受け渡して、自分は王に取り入ろうという魂胆のようだ。ソラのお父さんはそんなことしない。だとすれば、しつこくソラを始末しようとしてた隣国の王かな。それ以外は力がないらしいから多分そう。それに、わたしの記憶が正しければそこの王は醜い容姿で有名で。とにかく、絶対ヤだ。

「そんな事、勝手に決めないで。わたしはここに残るの」

「まぁ、そう言うと思ってな。お前の護衛が離れるこの時を待たせ

てもらった」

「――っ！！」

そうだ。どうしようもなく迂闊だった。勢いに任せてソラに行き先を告げてない。それどころか着いてこないで、とまで言ってしまってる。わたしは悔しさから唇を噛んだ。

――と、悪魔が噴き出すようにして笑う。

「やっぱりな。言ってみるものだ。護衛が来ないことは、なにによりお前の表情が物語っている」

知らずに適当に言ったのか、と気付いた時には遅かった。これでは、ソラは来ないと自分で言ってしまったようなものだ。

「……相変わらず狡いわね。でも、それだけが取り柄のあなたにわたしを捕まえられるの？」

今のわたしに精一杯の威勢。勿論、逃げ切れる保証なんかない。寧ろ、捕まる可能性の方が高い。なんとか引き延ばせばソラが来てくれるかも。悔しいけど、わたしはその可能性に縋るしかなかった。

「なにも考えてないと思ったのか？　巡って来たのし上がるチャンス、逃す手はない。――出て来い！！」

わたしの希望は悉く潰えていた。何故なら、建物の陰や茂みの中から別の悪魔が出て来たから。最初から用意周到に塞がれていたのだ。わたしの逃げ道は。

「おぉっ、本物じゃないかっ！」

「い、何時も見てました。ササ、サイン下さい」

狼のような体毛を生やした狼人種、息も荒くでっぷりと肥えた豚のような……なんだろう、コレ。き、気持ち悪い。総勢で十数人。それらがわたしを囲んだ。目を色欲に狂わせて。

「な、なにするの……？」

「なぁに、傷付けたりはしないさ。魔王様への献上品だからな」

「く……ぅ」

理性がこんなに邪魔だとは思わなかった。睨み付けることしか出来ない。それも虚勢。恐怖に竦む足は動く気配すらなくて。小さく、微かに震えるばかり。

「――やれ」

「ちょっ！　なっ、なにするの！？　わたしに触らな――むぐっ！？」

遂に悪魔の一言がわたしを捕らえた。囲まれて逃げ場はなく、死角から伸びる手にわたしは抗えない。振り払うように振り回した腕は他の誰かに掴まれて、抵抗する口には布を放り込まれた。

華のようなほんのり甘い香りが鼻孔をくすぐる。

なんだろう。この匂いは――

わたしの意識はそこで途切れた。

「連れて行け。早急にだ。幾ら伝説の悪魔とは言え、単身で敵国に乗り込んでは来ないだろうからな」

暗い闇の中で、わたしは手を伸ばす。夢か現か、目の前に見える一人の悪魔に。今となっては、わたしの心の内で一番大きくなってしまっているその存在へと――

4話：誘拐（後書き）

意志と逆にほのぼのからどんどん離れて行くような……。

5話：理由（前書き）

蒼空視点。

5話：理由

着いてこないでと言われた次の日。
邪魔ものが居なくなったと考えることもあったけど、やっぱり気になってる自分も居て。酷いときは、人間の女の子に声を掛けられて気付かないこともあった。激しく後悔したけど。
とにかく気になるくらいなら、と捜索を始めた。
山、街、ホテル……。
こっちに来てから一緒に行ったところを一通り回る。しかし、いない。
おかしいな。と思いつつも、

「……まだ探してないところなんてあったっけ？」

再び記憶を辿る。
――その時だった。目の前に同族が現れたのは。

「あれ？　お前は確か親父の配下の――」

それは親父の配下で、俺も顔見知りの黒い翼を生やした一般的な悪魔だった。
急になんだ？　それもなにやら神妙な面持ちで。まぁ親父の配下に探知系の能力者も居るから、いつかバレるとは思ってたけど。

「魔王様からの伝言です。今まで動きのなかった隣国の悪魔共が攻めてきたから、至急戦列に加われ。と」

なるほど、あの豚がね。前から嫌がらせがウザかったやつだ。絡

んでくる悪魔って五割ぐらいはあいつの部下だし。思い出してイラっとする。まぁ俺がルナと仲良くしてんのが気に食わないんだろうけど。

「そんなの親父だけで十分だろ？　やだって言っといて」

今はそれよりルナを探さないとな。でないとなんかモヤモヤする。鬱陶しい。

「そうは参りません。最近、奴らは急激に勢力を伸ばしています。恐らく強力な用心棒を得て――」

あぁ、最後まで聞いてられん。一応、親父には借りもあるし手伝ってやりたいけど。今はルナを探してやらないとな。

「今は忙しいんだ。他を当たってくれ」

あれ、なんで俺はルナに固執してんだ？

「今やあなたの性格はみなが知り得ること。ですが、今は国が一大事なのです。どうか御協力のほどを」

「そうは言われてもな――」

――と、突然俺の隣でなにかが割れるような音がする。

「なんだよ？　今日はよく絡まれる日だな」

次いで空間に穴が開いて、中から悪魔が出てくる。これも一般的なやつ。

「雑魚かよ……」

最初は何時もの金目当ての追っかけかと思った。でも、中から現れたのは一人だけで大した強さも感じない、どうやら俺を殺しに来たわけでは無さそうだ。

「ふん……お前がソラか？」

「あぁ、多分な」

「なんだ、国中が殺気立ってるからどんな豪傑かと思えば……ただの小僧じゃないか」

雑魚が笑う。なにがおかしいのやら。構ってる時間はないからとりあえず死刑。

錬金術使用、鉄の棒が刀を形成する。有り余る魔力を漲らせて肉体強化。並みの悪魔なら視認出来ない速度で跳ぶ。

それとほぼ同時に手と足を切り裂いた。

「ムカつくお前に大サービス。最後に一言どうぞ？」

「は？」

ご丁寧に動く前の位置に戻ってやると、雑魚は斬られたことすら気付いていないようだ。

遅れて手足が飛ぶ。特有の汚い血が舞い、悪魔が苦痛に叫ぶ。

「騒ぐな。まだ生きてるだろ？　俺を馬鹿にしたお前が悪い」

「ぐォォォ！！　……くく、グハッ！　こ、これが伝説の力か……恐ろしい」

「雑魚が俺なんかに絡むからだ。で、言いたいのはそれで全部か？」

最後の一閃。俺は刀を振り上げる。

「ま、待て！　魔王様からの伝言を預かってる！」

――え、なに？　お前も？

違うところと言えば、よりウザい奴からってとこか。

「はぁ……なんだよ？」

「お前の幼馴染みを賭けて我が城で勝負だ。だとよ」

チッ、道理で居ないわけだよ。あー、無駄に探した時間返せよあの豚がっ！

「……はいはい。じゃあな」

きっちりトドメを刺して元の棒に戻す。直しながら、親父の配下に声を掛ける。

「相変わらず素晴らしい手際の良さ。どうやら、腕は微塵も衰えてないようで」

「あぁ、面倒くさいからさっさと済ましてるだけだって。それより

親父に言っとけ」

「……はっ！」

悪魔が膝を付く。それを横目に見ながら、俺は空間を叩き割った。

「先に行く、って」

再度、刀を形成。右手に構えて、俺は穴に飛び込む。
親父の頼みもあるし、個人的な恨みもある。
なにより、居ないとイライラする幼馴染みの為に――

5話：理由（後書き）

気に入らないところがあればご指摘下さい。
可能な範囲で直します。

6話：狭間（前書き）

ちょっと残酷な表現が含まれるかも。

そんなに酷くは無いはずですが、見た人がどう思うかわからないんで警告しときます。

6話：狭間

魔界には太陽がない。よって、自然と養分が足りずに地平線まで乾いた荒野が広がる。そう、ここは魔界。

「久しぶりに、帰ってきたぜ！」

――まではいい。そこまではバッチリだ。穴をくぐる時は決まってた筈だし。

でも、まさかここまで大事になってたとは。

乾いた風が吹き抜ける荒野。いつもはどこか寂しいその風景は、今や砂埃舞う戦場の舞台と化していた。素人も玄人も、悪魔共が各々の信頼に足る武器を用いてあちこちで火花を散らしている。

「……こりゃ俺にはちょっと荷が重かったかな？」

ど真ん中に登場するはずだったけど、本当にど真ん中に出てしまった。

やってやるよとそれを行うまでは威勢よく言ったものの、実際に直面すると話は別だ。今まで適当に済ませてきた所為か、どうにも緊張してしまってる。

なにしろ誰かを助ける戦いなんて初めてで、さらに国同士の争いだ。規模が半端じゃない。

と、気付けば考えながらも襲って来るやつを切り捨てていた。

「……まぁいいか」

もう始めちゃってるし、こうなればどうにでもなれだ。
右手に魔力を収束。特大の火球を作り出す。
「あ、あれは！？　最高額賞金首の黒鵺衣じゃないかっ！！」
「あ、見つかった。……まぁこれだけデカいの作れば当然か」
俺は巨大に膨れ上がった火球を適当に放った。
巨体に見合った速度で落下する火球は、地面に触れた直後に爆発して触れた物を焼き尽くす。
圧倒的な火力の前にただ呆然と動きを止め、漸く挑んだ相手の強大さに気付いたようで。
絶望を与える存在の悪魔が、逆に顔を絶望に染められて、見渡せば一斉に口を閉ざしていた。
「……あー、誰か。豚のとこまで案内してくれない？」
沈黙。常識をぶち破って炭化した砂のはぜる音が響く。
揃って口を閉ざし、距離を置く集団。そんな中、歩み出る男がいた。
「我が輩に勝てば、案内してやらんこともないぞ？」
右手には両刃の片手剣。左手には盾を持ち、俺の耳にも聞き覚えのある異名。
”剣豪”と、男はそう呼ばれていた。
「あー、俺は何時も暢気にしてるけどな。上から言われるのだけは

どうもムカつく！」

構えるのも待たず、縦に斬撃を放つ。更に間髪入れずの連撃。

しかし、驚いた事に男は手に持った盾と剣でそれを防ぎ切った。

どうやらちょっとは出来るやつのようだ。

「へぇ……」

「少しは考えを改める気になったか？」

「いや、こんなんじゃまだまだ」

剣と刃が交錯し、火花が散る。

才能と魔力で瞬発力を底上げしてる俺とは違う。力強い刃。

恐らくこの男は、鍛錬のみでここまで上り詰めたのだ。

その証拠に、この男からは魔力や特殊能力といった力が全く感じられない。性能、才能の差を埋める実戦経験の量が、鋭く速く、鈍く重く振るわれる剣から言葉よりも遥かに如実に伝わってくる。

――とは言え、俺はまだまだ本気じゃない訳だ。はっきり嫌みで言うけど。俺は桁が違う。

「あたた。手が痺れてきた……」

「ふん。仮にも魔界最強を謳う輩が、まさかこれしきとは言うまいな？」

「……ははっ、まさか」

コイツ。確かな強さを持ってる癖に、敵の力量も測れないのか？

「何が可笑しい？」

「だって、誰が全開なんて言ったんだ？　俺はまだ本気の半分も出しちゃいないぞ」

「は？」

――全魔力解放。限界まで速度上昇。初速から既に音速に達する速度で突進して。

そこから右、左と。俺は一瞬で接近すると腕に向けて刀を振るう。

稲妻のような速さで刀が通り過ぎると、追いかけるようにして悪魔の血が辺りに飛び散った。

「ぐぉぉ……っ！？」

ビチャ。濡れた布を叩きつけたような音。飛んでった腕が地面に落ちた。

そんな様子を見ながら、男はただ膝を付き痛みを堪えていて。睨んでくるかと思いきや、それもない。

……あっ、そんなの見てる場合じゃなかった。

「驚いてる暇ないぞー。さ、早く案内してくれ」

「ギリ……ッ。き、貴様……！」

「俺を馬鹿にしたお前が悪いんだろ」

「そんな理由でっ、我が輩の腕を……ッ！！」

――なんだコイツは？　数多の戦いを経験しておきながら、今まで何も失った事がないのか？

「あのな。そもそも戦場に出てくれば必ずなにか失うもんだろ？今みたいに四肢とか、命とか、良心、友、誇り……。失った事もない。その覚悟もない。そんなやつが、こんなとこ来るなっ。さ、話は終わりだ。約束通り案内しろ」

「しょ、承知した……」

「……って言ってもその身体じゃ無理だな」

困った俺は、集団から適当に一人選んで指差して命じた。

「じゃ、お前」

「はっ、はい！？」

その後。直ぐに真横に移動して刀を喉に突き付け、言い放つ。

「お前が代わりに案内して？」

「……はい」

それから、散歩するように歩き出す。聞けば、ここからそんなに遠くないみたい。だったらまぁいいかって考えだ。

「あ、邪魔して悪かったな。俺は行くから続きどうぞ」

――歩いて凡そ１０分。俺達は豚の根城に辿り着いた。

「案内ごくろー」

「いえいえ。それでは」

「あぁ、サンキュー」

悪魔が軽く頭を下げて去っていく。話してみればなかなか気さくな悪魔だったなぁ。

「……にしてもあいつ、知らない間に立派なもん建てやがって」

こんな城いつの間に建てたんだか。

まず目につくのが門だった。なんだか、柄が人間界でみた板チョコみたいだったから。でもあれより茶色いし。でかい。あんまり美味しくなさそう。

それと飛び出た塔のような筒と、丸い屋根。横に、隣接して四角い建物。それを長方形に囲う外壁。

なんだろう、全体的に白を基調にしてるのかな？　まぁ、城の見物はこれぐらいにしといて。

「挨拶はちょっと派手にしとくか」

魔力によって空で唸る黒雲を操作する。目標は目の前の大層な門っ。上部に固定して。それから――

「……堕ちて砕けっ」

轟く雷鳴。唸るようなその音に、格好つけたのに耳を塞ぐ。激突

して散る光。迸る電流。
余りに強大な力の塊は、瞬いて。目を開けば巨大な穴だけを残していた。
遅れて黒煙が立ち上る中、そこでちょっと思索に耽る。
「全部壊すか。探すのめんどいし。イライラするし」
結論。見栄張りやがって、気に入らないから全部ぶっ壊すっ。
「――はぁぁぁっ！！」
そうと決まれば話は早い。城ごと壊すぐらいの勢いで、中にいた悪魔共を根こそぎぶっ飛ばしながら進む。ついでにと立ち塞がる壁は全部ぶち抜いて置いた。
後半は迷子になったけど、遂に中枢。そこには白い壁で囲んで、床に赤い布を敷いただけの簡単な広間があって。奥で豚が玉座に座ってた。隣に立たされてる両の手足を縛られたルナと、のんびり喋りながら。
「……おい」
「ブヒッ！？」
豚が鳴いた。話に夢中で気付いてなかったようだ。
にしてもキモい……。卑しく歪んで、潰れた顔面。真ん中に大きく空いた鼻。短足短身の肉塊。
「……き、気持ち悪ぃ」

「ひ、酷い！！」

「まぁ、脂肪ごと燃やしてやるから大丈夫だ。安心しろ」

右手を上に。掌に魔力を収束する。宣言通りに、炎を。渦を巻いて、それは球状に凝縮していく。

「ま、待て待て！」

豚が鳴く。ルナを盾にして。

「ブヒヒ。さぁ、これでも攻撃出来るかな？」

「なっ？　あ、あんたそれでも男なのっ！？」

慌てるルナを見て、俺は魔力の供給を止めた。炎が制御を失い、霧散していく。

「ほら、もう考えが汚いんだよ。何のために誘拐したんだ？　嫌われてちゃ意味ないだろうに」

「むぐ……っ。そ、そんなこと言っても、結局は手を出せないだろー？」

「……」

――いや、そんなこともないんじゃないか？

最高速でルナだけ避ければ。後はあんな豚、速攻ボコボコにして終わりだ。いや、でも、失敗すれば――うん、俺ならやれるさ。

「よし、それが最後の言葉だな？　じゃ、覚悟しろよ。お前の所為で、こんなとこまで来る羽目になったんだからなっ」

びっ。勢い良く指を突き付ける。……決まった。

「なになに？　ブヒッ！？　なるほど、よくやった」

ところで豚は、下級悪魔の耳打ちに聴き入っていた。

「……おい、聞いてんのか？」

「聞けい！」

「だから返事になってないんだよ。なんだお前？」

「僕の配下が、隣国の王。つまり、お前の親父を捕らえたそうだ」

「はぁぁ？」

なにやってんだ。あの馬鹿は。こんな豚に良いようにされたって？

「僕が死ねば、お前の親父を殺すように命令してある。どうするかな？」

「……あのな。先に言っとくけど、お前に頭下げるぐらいなら暴れて全員殺すからな？」

「ブヒッ！？　じ、じゃあせめて三歩後ろに退いてください」

どうしよっかな。うーん。癪だけど、いいか。

「よし、まぁそれなら良いだろ」

言われた通りに三歩下がる。

「引っかかったな！」

豚が叫ぶのと同時。ガコン。と、足元から物音がする。

「……おぉ？」

恐る恐る。下を見る。わぁ、真っ暗。

半径３メートル。目測でそれぐらいの大きさの穴が広がって、俺を飲み込んだ。

「それは次元の狭間で、更にお前に飛行能力はない筈っ。終わりだブヒッ！」

「あぁぁ――……」

バツッ。小気味よい音で出口が閉まる。

中は空洞。それに真っ暗でなにも見えない。黒、ただの黒。それしかなかった。

そんなだから外と直径が違うのかもわからない。方向感覚がおかしくなりそうだ。

……そう言えば。落下の風を受けながら、ふと思い出す。次元の狭間って言うと、一度落ちれば融解されて二度と出れなくなるっていう太古の罠だったっけ。

うーん、よく造ったな。あれって構造とか構成とか謎だらけだった筈なのに。よっぽど俺が気に入らなかったんだろーな。
でも、それならさ。もうちょっと調べとけよ。
俺が昔、暴れまわった時に付けられた異名。安直で気に入らないけど、”蒼空の脅威”ってやつを。ダサいのは置いといて、なるほど。特徴は捉えてるよ。

「懐かしいな。久々に二つ名通り、暴れてやるか」
――神の加護、最終弾。魔力全解放――

背中から真っ白な翼が広がる。悪魔のような、純白の双翼。
悪いけど、飛行は一番得意だっ。

「さて、と。久しぶりに全力になった訳だけど、まだおぼえてるかな？　神力の扱い方」

この状態でのみ、使える力というのがある。それは翼から聖力を拝借して、魔力を混合したもので。神力（しんりょく）という最強の力。
なんでも、昔にも一人居たらしい。俺みたいに神力を扱えたやつ。魔界の王であり、天界の神だった存在で。魔神と呼ばれてたやつが。
錬金術発動。神力が一つの武器を作り出していく。

――銃。それが、俺に最も適した形だ。名前なんてない。世界にただ一つ、弾倉内部で魔力と聖力を混合させて吐き出す俺の武器。
「……次元の狭間から脱出したやつはいないらしい。でも、これで俺が唯一の脱出者になるわけだっ」
手に持った銃が俺の身体から燃料を抽出して発光、淡く光を帯びる。

光はどんどん強さを増していき、せき止めてる栓を外すように俺は引き金を引いた。
その瞬間、狭間から音が消える。色も、感覚も全てが真っ白に澄み渡って。
視界を染める光の中、純白の双翼を広げる。そして、迷いも懸念もなく、俺は光に向かっていった。

「――ぶはっ。息すんの忘れてた。……なんとか出れたか」
「プギッ！？　な、何故だ！　あれは絶対に出られない筈……っ」
豚がひしゃげた顔を驚愕に染める。ま、それでこそ出て来た甲斐があるってとこだ。
「俺を常識で考えんなー……つっても、状況は変わんねーか」
「そっ、そうだ！　お前が動けば、大事なものを失うぞぉ～？」
「……チッ」
一騎打ち、は応じなさそうだし。殺したら親父がなー。じゃ、気絶させよっか？
同じか。部下が殺しちゃうわけだ。ふむ、どーしたもんか……。

6話：狭間（後書き）

かなり間が空いてこれかよっ。

自分でもわかるんすけどねー……。

文才って、どこで売ってんだぁーっ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3386s/

お気楽悪魔

2011年5月6日11時36分発行